慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初級漢字クラスの授業報告 : 読解クラスとの関わりを通じて
Sub Title	
Author	中村, 愛(Nakamura, Ai)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2017
Jtitle	日本語と日本語教育 No.45 (2017. 3) ,p.43- 53
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20170300-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』45：43−53（2017.3）

初級漢字クラスの授業報告

―読解クラスとの関わりを通じて―

中　村　　愛

1.　はじめに

本稿は 2015 年、2016 年の春学期、秋学期の「表記法 2」の取り組みと、同じく 2 レベルの技能別科目である「文章講読 2」との関わりについて報告する。「表記法 2」は初級の漢字の運用能力を身に付けることを目的とした漢字クラスであり、「文章講読 2」は初級レベルの平易な文章の読解能力を身に付けることを目的とした読解クラスである。筆者は両科目を 4 学期間担当し、「表記法 2」の受講者のうち「文章講読 2」を受講した学生と受講しなかった学生の様子から「表記法 2」と「文章講読 2」との相関関係について考察する。

2.　「表記法 2」

以下に 2015 年、2016 年の「表記法 2」の授業の概要を述べ、春学期と秋学期の実践報告を行う。

2.1　「表記法 2」シラバス

2015 年春学期、秋学期と 2016 年春学期、秋学期のシラバスの内容は基本的に同じである。中村（2015）で 2015 年秋学期の内容を報告しているが、本稿では最新の 2016 年秋学期の内容を表 1 に示し、改めて報告する。

表 1　2016 年秋学期「表記法 2」シラバス

授業科目の内容	
The course is designed for students who have already learned approximately 100 elementary kanji. The course aims to aid students in reading and writing of further 100 elementary kanji (Unit 11−Unit 20 in the textbook) and associated vocabulary.	
授業の計画	
第 1 回	Individual Academic Counseling
第 2 回	Level Check Test/ Introduction/Review (Intro−Unit 10)
第 3 回	Unit 11
第 4 回	Unit 12
第 5 回	Unit 13
第 6 回	Unit 14
第 7 回	Unit 15
第 8 回	Review (Unit 11−Unit 15)
第 9 回	Unit 16
第 10 回	Unit 17
第 11 回	Unit 18
第 12 回	Unit 19
第 13 回	Unit 20
第 14 回	Review (Unit 16−Unit 20)
第 15 回	Summary and Final examination
成績評価方法	
Attendance/Final Examination/Small tests/ Homework/Class Participation	
テキスト（教科書）	
Minna no Nihongo Shokyuu I Kanji 2nd Edition-English Edition (3A Corporation)	

授業の到達目標は『みんなの日本語初級 I 漢字英語版』ユニット 11 からユニット 20 までの漢字の読み書きを正確に覚え、運用能力を身につけることである。各ユニットで導入する漢字は、慶應義塾大学別科・日本語研修課程で作成した授業用資料に基づき、平均 10 前後であるが、読替えの

漢字も含めると合計 139 の漢字語彙を学習する。1 コマ 90 分、15 回という限られた授業時間でこれらの導入と練習を効率的に行うため、授業は筆者作成教材を中心に進め、教科書は主に復習に使用した。

成績評価は試験（期末試験、小テスト）30%、宿題 30%、授業中の活動 40%とし、総合点 90 点以上を A、89 点から 80 点までを B、79 点から 60 点までを C、59 点以下を D とした。

2.2 「表記法 2」レベルチェックテストと履修者

2015 年春学期、秋学期と 2016 年春学期、秋学期のレベルチェックテストの実施結果と履修登録者の内訳を表 2 に示す。

表 2 「表記法 2」レベルチェックテスト受験者数と履修者数

	2015 年春学期	2015 年秋学期	2016 年春学期	2016 年秋学期
受験者数	9 名	17 名	20 名	15 名
合格	7 名	9 名	16 名	13 名
警告	0 名	3 名	4 名	1 名
不合格	2 名	5 名	0 名	1 名
履修者数	5 名	12 名	11 名	11 名
レベル：人数	2 レベル：4 名 3 レベル：1 名	2 レベル：8 名 3 レベル：3 名 4 レベル：1 名	1 レベル：2 名 2 レベル：5 名 3 レベル：3 名 4 レベル：1 名	2 レベル：3 名 3 レベル：5 名 4 レベル：2 名 5A レベル：1 名

科目履修の可否は自由聴講期間に実施するレベルチェックテストによって決定する。テストの問題は「表記法 1」で学習する漢字から出題し、読み方と書き方を記述するものである。合否の判定基準は原則として正答率 8 割以上が「合格」、7 割が「警告」、6 割以下が「不合格」である。「合格」、「警告」は履修登録が可能だが、「警告」となった学生については履修に必要な知識や能力がやや足りず、授業についていくことが難しいと予想されるため、履修について事前によく検討するよう伝えた。

レベルチェックテストの受験者数は、2015 年春学期が 9 名で最も少な

かった。2015 年秋学期から 2016 年秋学期までの 3 学期間は 17 名、20 名、15 名と 20 名弱であった。テストの合格率が最も高かったのは 2016 年春学期で「合格」、「警告」を合わせると 100％であった。最も低かったのは 2015 年秋学期で 71％であった。年度で合格率を比較した場合、2015 年度は約 75％であったのに対し、2016 年度は 97％と大幅に上がっている。テストの難易度に変更はなかったが、2015 年度の不合格者には 1 レベルの学生の割合が高く、その中には漢字だけではなく、平仮名や片仮名といった文字の習得が十分ではない学生が多かったことが理由の一つとして考えられる。履修者数は受験者数と同様に、2015 年春学期が 5 名で最も少なかったが、2015 年秋学期から 2016 年秋学期までの 3 学期間は 12 名、11 名、11 名であった。また、「警告」となった学生は全て履修登録を行った。履修者のレベルの内訳は、2016 年秋学期を除いては 2 レベルの学生が最も多く、レベル設定からして想定内の結果と言える。各学期とも 2 レベル以外の学生も履修し、2015 年春学期は 2 レベルと 3 レベル、2016 年秋学期は 2 レベルから 4 レベル、2016 年春学期は 1 レベルから 4 レベル、2016 年秋学期は 2 レベルから 5A レベルの学生が履修していた。特に、2016 年秋学期は 3 レベル以上の学生が 7 割を占めている点で他の学期と異なっていた。

2.3 「表記法 2」授業内容

授業は表 1 の「授業計画」に沿って行った。授業のペースは基本的に 1 回に 1 ユニットずつ進め、学期の半ばに前半の復習を行い、期末試験の前に後半の復習を行った。全 15 回ある授業のうち、春学期は 4 回目と 5 回目の間にゴールデンウィークを挟むが、それ以後は最後まで同じペースで授業が続いたのに比べ、秋学期は 8 回目と 9 回目の間に三田祭があり、13 回目と 14 回目の間に冬期休暇を挟んだため、前半の復習の時期を調整するなど春学期と秋学期とでは授業のペース配分が異なった。授業は筆者作成教材に沿って進め、教材については中村（2015）で問題例を挙げて述べ

たが、受講者が考えながら漢字の読み方と書き方の知識を学び、練習問題を解きながら運用練習を行う目的で作成した。授業の流れは次のとおりである。

【1】 読み方の導入

【2】 書き方の導入

【3】 書く練習

【4】 読む練習

【5】 既習漢字の読替え練習

【6】 応用練習

【7】（その日に学習した漢字の）総復習

【1】読み方の導入、【2】書き方の導入では「先生」と「学生」、「教える」と「習う」のように意味的な関連があるものを一緒に導入し、読み方や書き方だけでなく、漢字や単語の意味にも意識が向くよう進めた。【2】書き方の導入の際は筆順、字形にも注意を促し、正確に覚え、書けるように指導した。【3】書く練習、【4】読む練習では、「教える」などのように送り仮名を伴う場合、「教」だけではなく、「教える」のように単語単位で書いたり読んだりするよう促した。【5】既習漢字の読替え練習では、既習漢字の知識を用いて練習問題を解きながら新しい読み方を導入、練習した。【6】応用練習では、その日の学習漢字の読み方と書き方の練習問題を行い、【7】総復習で、指定教材の例文の振り仮名を消した問題を全体で音読した。この活動はその日に学習した内容の確認と達成感を感じてもらう目的で行い、時間に余裕がない場合は自宅学習とした。

2.4 「表記法 2」授業報告

別科・日本語研修課程の受講生は秋学期に来日し、春学期まで継続して1年間在学する学生が多く、春学期と秋学期では春学期の学生のほうが日本語のレベルが高い傾向にある。また、2.3で述べたように春学期にはゴールデンウィーク、秋学期には三田祭と冬期休暇があることから授業の

ペース配分も若干異なる。そこで、2015 年、2016 年の春学期と秋学期の授業の様子について報告する。

春学期は練習問題を解くスピードが全体的に速く、応用練習や総復習といった練習を多く行うことができた。2016 年春学期には 1 レベルの学生が 2 名受講していたが、漢字の学習歴があり、日本語の文字を読んだり書いたりすることにも多少慣れていたため、授業中の活動を進める上で特に問題はなかった。前半、ゴールデンウィークによる休講の直後は若干、文字を書くペースが落ち、既習の漢字を忘れてしまう学生が見受けられたが、その後、回を重ねるごとに元のペースに戻り、徐々に応用練習や復習に割ける時間が増えていった。秋学期は 3 レベル以上の受講生も含め、全体的に漢字を書くスピードが若干遅く、練習問題にも時間がかかることが多かった。また、新出漢字の導入後、漢字練習用のマス目用紙やノートに書いて練習をする活動では、送り仮名を書かない学生が多く見受けられ、運用力を身につけるために漢字の意味を意識し、単語で練習するよう繰り返し促した。また、授業の進度は、後半、三田祭による休講を挟む前に学習漢字の導入と読み方、書き方の基本的な練習を集中的に進め、三田祭後には少しペースを緩めて復習を入れながら既習漢字の定着を図った。2015 年、2016 年ともに三田祭後と冬季休暇前後は小テストや練習問題の正答率が落ち、漢字だけでなく平仮名や片仮名についても字形が崩れる傾向があったが、授業での復習や宿題によって期末試験の前に元のペースに戻る学生が多かった。春学期も秋学期も受講者の大半は漢字への関心が高く、授業中の活動にも自宅学習にも最後まで熱心に取り組んでいた点で共通しており、徐々に問題の正答率が上がり、ほぼ全員が到達目標を達成することができた。

3. 「表記法 2」と「文章講読 2」

ここでは「文章講読 2」の授業の概要を述べ、同じ 2 レベルの技能別科目である「表記法 2」と「文章購読 2」との関わりについて述べる。

3.1 「文章講読 2」のシラバス

2015 年春学期、秋学期と 2016 年春学期、秋学期のシラバスの内容は基本的に同じであり、中村（2015）で 2015 年秋学期について報告しているが、本稿では 2016 年秋学期の最新の内容を表 3 に示し、改めて報告する。

表 3　2016 年秋学期「文章講読 2」シラバス

授業科目の内容	
The course is designed for students to enhance their reading comprehension skills based on sentence structures and grammatical patterns learned in Minna no Nihongo Shokyuu I (L14−L25).	
授業の計画	
第 1 回	Individual Academic Counseling
第 2 回	Level Check Test/Introduction/Review (Lesson 13)
第 3 回	Lesson 14
第 4 回	Lesson 15
第 5 回	Lesson 16
第 6 回	Lesson 17
第 7 回	Lesson 18
第 8 回	Lesson 19
第 9 回	Lesson 20
第 10 回	Lesson 21
第 11 回	Lesson 22
第 12 回	Lesson 23
第 13 回	Lesson 24
第 14 回	Lesson 25
第 15 回	Summary and Final examination
成績評価方法	
Attendance/Final Examination/Small Tests/ Homework/Class Participation	
テキスト（教科書）	
Minna no Nihongo Shokyuu I 2nd Edition Shokyuude Yomeru Topikku 25 (3A Corporation)	

到達目標は①初級レベルの平易な文章の読解能力を身に付けること、②文型、語彙、漢字を理解し、一まとまりの文章の内容が読み取れることである。具体的には『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』第 14 課から第 25 課までの語彙や文型を理解し、まとまった短い文章が読めるようにすることを目標とした。『みんなの日本語初級Ⅰ初級で読めるトピック 25 第 2 版』を指定教材とし、授業では同教科書の第 14 課から第 25 課までの本文を一部リライトしたもの、または筆者作成教材を使用した。成績評価は試験（期末試験、小テスト）30%、宿題 30%、授業中の活動を 40%とし、総合点 90 点以上を A、89 点から 80 点までを B、79 点から 60 点までを C、59 点以下を D とした。授業の流れは次のとおりである。

【1】 本文の読解に必要な文型の導入

【2】 問題文の読み合わせ

【3】 本文と問題

【4】 本文の読み合わせ（1 人 1 文ずつ音読）

【5】 問題の答え合わせ

【6】 問題用紙を見ずに【5】の問題の口頭練習

【7】 本文の音読（※時間に余裕があるときのみ）

課によっては【1】を【5】の後に行うこともあった。

3.2 「表記法 2」と「文章講読 2」の受講者

「表記法 2」で学習する漢字は「文章講読 2」の読解教材の中でも用いられており、読解クラスの活動は 2 レベルの漢字の運用練習も兼ねている。そのため、「表記法 2」の履修希望者には、自由聴講期間に行うガイダンスの際に「文章講読 2」も履修することを強く勧めている。そこで、2016 年春学期と秋学期の「表記法 2」の受講者について「文章購読 2」も履修した学生の人数調査を行った。その結果を表 4 に示す。

表 4 「文章講読 2」を並行履修した学生としなかった学生の数

	2016 年春学期	2016 年秋学期
「表記法 2」履修者数	11 名	11 名
「文章購読 2」も履修した学生数	6 名	9 名
「文章購読 2」を履修しなかった学生数	5 名	2 名

2016 年春学期は「文章講読 2」と並行して履修した学生が 6 名、履修しなかった学生が 5 名で約半数ずつであった。履修しなかった 5 名のうち、1 名は 3 レベル以上の読解クラスを履修し、2 名は文法または会話のクラスと並行して履修していたが、他 2 名は「表記法 2」以外、日本語の科目を履修していなかった。一方、2016 年秋学期は「文章講読 2」を並行して履修した学生は 9 名で大多数を占め、履修しなかった学生は 2 名であったが、この 2 名は 3 レベルと 4 レベルの読解クラスを履修していた。春学期と秋学期とでは並行して履修した学生の割合に差があるが、春学期は「文章講読 2」が 2 時限目、「表記法 2」が同日の 4 時限目にあり、午前と午後で授業時間に隔たりがあったが、秋学期は「表記法 2」が 1 時限目、「文章講読 2」が同日の 2 時限目であり、教室も同じであったことから、履修の選択に時間割が影響していた可能性が高いと考えられる。

3.3 「表記法 2」と「文章講読 2」との関わり

「表記法 2」の受講者のうち、「文章講読 2」と並行して履修した学生とそうでない学生とでは授業中の活動の様子や宿題の内容などについて異なる点が見られた。中でも「文章講読 2」と並行して受講した学生は、特に学期中盤以降、漢字の練習問題を解くスピードが徐々に速くなり、正答率も上がっていった。漢字の練習問題は文章の中に用いられた漢字の読み方や書き方について答える形式であるが、初めの頃、漢字以外の部分についても文法項目や単語の意味を理解するまでに時間がかかり、読み間違いが目立っていた受講者も、学期後半になると問題文を正しく読み進められることが多くなった。「文章講読 2」では教材の本文に「表記法 2」で学習した既

習漢字が用いられており、練習問題の問題文にも既習漢字が含まれている。また、答えを記述する際にも、2 レベルの文型とともに既習漢字を用いるよう促しているため、「表記法 2」の受講者は「文章講読 2」の授業活動を通じて、既習漢字の運用練習を行うことになる。また、学期の後半に「表記法 2」で応用練習として既習漢字で短文作成を行った際、「文章講読 2」と並行履修している学生は既習の文型と漢字を正確に用いて文が作成できることが多かったが、並行履修していない学生は基本的な文型や活用の間違いに加え、送り仮名の間違いが多く見られた。単語の読み方だけを問う問題でも、動詞、形容詞の送り仮名の間違いが目立ち、改善に時間がかかった。また、並行履修していた学生の中には漢字の字形が徐々に整っていくことが多く、平仮名、片仮名についても同様であった。

4. おわりに

「表記法 2」では、春学期と秋学期を比較した場合、春学期の受講者は秋学期に比べ、練習問題を解くスピードが速く、授業時間内に応用練習などの練習をより多く行うことができた。また、春学期と秋学期は学事日程の違いにより授業のペース配分が異なり、春学期は学期中盤以降、ほぼ同じペースで授業を進めたが、秋学期は三田祭までの期間に新出漢字の導入と基本練習を集中的に行い、それ以降は復習を入れながら緩やかな進度で授業を進めた。学期によって受講者のレベルは異なり、2 レベル以外の学生の割合が多い学期もあったが、いずれの学期もレベルに関わらず、受講者の大半は漢字に対する関心が高く、自宅学習にも熱心に取り組んでいた。また、「表記法 2」の受講者のうち、「文章講読 2」と並行して履修した学生の多くは、学期中盤以降、漢字の練習問題を解くスピードが徐々に速くなり、正答率も高く、既習の漢字を用いて正確な文が作れるようになった。その理由の一つとして、「文章講読 2」の活動が「表記法 2」で学んだ漢字の運用練習になっていることが考えられる。一方、並行履修していない学生

は学期終盤になっても動詞、形容詞など、活用に関わる語彙の送り仮名の間違いが目立った。このことから、「表記法 2」と「文章講読 2」とは相関関係があり、「文章講読 2」の活動は「表記法 2」で学習する漢字の運用練習となるため、「表記法 2」を履修する場合には「文章講読 2」も並行して履修することを引き続き勧めたい。また、「文章講読 2」の活動では 2 レベル相当の漢字の知識が必要となるため、「表記法 2」の授業を履修した上で受講することが望ましいと思われる。今後は読解クラスの受講者が漢字クラスを受講した場合の学習効果や、同じレベルにおける科目間の関わりについても考察を深めていきたい。

使用教科書

『みんなの日本語初級 I 本冊　第 2 版』スリーエーネットワーク編著（2012）スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級 I 漢字　英語版　第 2 版』西口光一監修、新矢麻紀子・古賀千世子・高田亨・御子神慶子編著（2014）スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級 I 初級で読めるトピック 25　第 2 版』牧野昭子・澤田幸子・重川明美・田中よね・水野マリ子著（2014）スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説　英語版　第 2 版』スリーエーネットワーク編著（2012）スリーエーネットワーク

参考文献

大神智春・清水百合（2010）『BASIC KANJI WORKBOOK 使って、身につく！漢字×語彙 1』凡人社
加納千恵子・清水百合・谷部弘子（2015）『BASIC KANJI BOOK1 新版』凡人社
加納千恵子・清水百合・谷部弘子（2015）『BASIC KANJI BOOK2 新版』凡人社
坂野永理・池田庸子（2011）『初級日本語げんきⅡ　第 2 版』ジャパンタイムズ
坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2011）『初級日本語げんき I 第 2 版』ジャパンタイムズ
中村愛（2015）「初級レベルの授業報告―基幹コース 3 科目を担当して―」『日本語と日本語教育』（44）慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
西口光一（2007）『3 級編　例文で学ぶ漢字と言葉』スリーエーネットワーク
牧野昭子・沢田幸子・重川明美・田中よね・水野マリ子（2000）『みんなの日本語初級 I 初級で読めるトピック 25』スリーエーネットワーク